# 9　陸軍航空医学

黒澤嘉幸

明治三十六年、米国人ライト兄弟が航空機による飛行に成功してから、飛行機は徐々に進歩し、明治四十二年、ブレリオが英仏海峡の横断に成功して大きな関心を集めた。

当時日本政府は航空機が将来国防上重要な兵器になると考え、その研究のため、明治四十二年臨時軍用気球研究会を設立した。

この研究会の当初メンバーは東京大学二名、気象台一名、陸軍十名、海軍六名であった。

このメンバーには衛生関係者は含まれていなかったが、制定された研究方針には、飛行士保護の航空医学の研究も含まれていた。

たとえば明治四十五年には「軍用飛行機ならびに飛行気球操縦および偵察術修業員の身体検査要領」を定めている。

したがって陸軍航空医学史を知るためには陸軍航空研究の全体像を把握し、その中で実施された航空医学研究を確認しなければならない。そこで今回は明治四十二年から終戦にいたるまでの陸軍航空研究の推移を明らかにすることとした。

陸軍は明治四十二年の研究会の意見にもとづき、飛行場用地の調査を行い、明治四十三年埼玉県所沢の畑地を購入し、明治四十四年四月飛行場を完成した。この滑走路は長さ四百米、幅五十米であった。この滑走路は所沢市にある航空公園に今も記念として保存されている。

また、明治四十三年には徳川好敏、日野熊蔵を仏国に派遣し、飛行機操縦術を習得させた。

この飛行場を使用し、徳川、日野を教官として飛行機操縦術の教育が始まったのは、明治四十五年のことであった。

しかし、大正五年海軍は臨時軍用気球研究会を脱会し、東京帝国大学も官制を改正し、大正七年付属航空研究所を設置し、飛行機、航空船、気球、航空心理を独自

に研究することになった。

そのため、陸軍は大正七年臨時軍用気球研究会の業務区分を改め、全員を所沢に配置した。

第一次大戦における航空機の活動に注目した陸軍は航空部を設け、航空に関する行政を所掌させることになった。

大正八年所沢に陸軍航空学校が設けられたので、航空部は臨時軍用気球研究会を航空学校の研究部に改めた。

大正十四年宇垣陸軍大臣在任時の軍政改革には、航空の拡張方針がとられ、航空兵科の独立、八個の飛行連隊の設置、陸軍航空部を航空本部に昇格などが行われた。

航空本部は前述の航空学校研究部を航空本部の技術部に改めた。

当時の航空本部事務分掌規程によれば、第二条の技術部の項には「航空に関する気象及び衛生の調査、研究、試験、立案」が載っている。

昭和三年技術部は立川に移転したが、航空衛生班は所沢に残留した。

昭和十年八月技術部は陸軍航空技術研究所になった。

昭和十二年八月陸軍航空技術研究所の一部が改正され「航空衛生に関する調査研究及び試験」が加えられ、昭和十三年航空衛生班は立川に移転した。

昭和十五年陸軍技術研究所はさらに強化され、八個の部に分かれた。

大東亜戦争における航空戦の状況は、科学戦、技術戦の様相を呈したので、昭和十七年十月研究所は八個の研究所に拡大された。

そのうち、第八研究所が航空衛生、航空心理、航空衛生に関する兵器、航空勤務者の身体検査を担当した。

昭和十九年航空本部は直属する陸軍航空適性検査部を新設し、東京の京王閣の建物に配置した。